

『今、なぜコーヌス義歯再考なのか？』抄録集

最新の研究からメタルフリー(ジルコニア内外冠)コーヌス義歯の可能性・その臨床応用について
～超高齢化社会に備えるべく包括的かつ有効的な補綴治療の一考～

田中昌博先生 大阪歯科大学有歯補綴咬合学講座 主任教授



ブリッジ、部分床義歯、全部床義歯の補綴物装着者の各年齢階級での割合を歯科疾患実態調査で見ますと、2005年では80歳以上で全部床義歯が50%を超えていました。それが2011年では、85歳以上で全部床義歯が、80歳～84歳で部分床義歯が、60歳～64歳でブリッジが50%を超えました。実態調査の回を重ねるごとに8020達成者が増加したと関連付けられます。ところが、歯や口の悩みに関する2016年実態調査によると、65歳以上の年齢階級で12.5～23.9%が「噛めないものがある」と悩んでおられます。「入れ歯では噛み応えが足りない。でも、仕方ない」との患者さんの声を聴きます。部分床義歯の設計が、これまでの設計でよいのでしょうか？維持ではなく[支持・把持]を重視し、[義歯の剛性]を高め、義歯と支台歯との間に設定した支台装置部分に発現する変位性を最小化できる[連結強度が高い]部分床義歯、まさしく歯根膜負担が主たるテレスコープ義歯を推奨します。

鳥井克典先生 大阪歯科大学有歯補綴咬合学講座 講師



テレスコープクラウンは主に部分床義歯の支台装置の1つとして用いられ、機能性および装着感ともに良好であり、清掃性が優れているなど多くの利点が挙げられる。しかし、テレスコープクラウンには金属が一般に用いられているが、現在、金属アレルギーや金属価格の高騰などの問題があり臨床での使用に制限がある。そこで、内冠および外冠にジルコニアを材料としたテレスコープクラウンの臨床応用を目指し現在、基礎研究を行っている。ジルコニア・テレスコープクラウンのテーパ角による維持力の変化、外冠の繰り返し着脱試験による維持力の推移また外冠の厚みによる破折強度など、これらの実験結果をもとに臨床応用に向けて考えてみたい。

森本剛先生 大阪府開業



日本における超高齢化は、もはや待ったなしの状況である。平均寿命世界一の日本において、他国の歯科事情は参考にならず、超高齢者に対して、咀嚼能力を確保しつつ、介護施設等で寝たきり状態になられても、安全かつ安定的に対応できる歯科医療ノウハウを、自ら開発していかなければならない。また、原状回復を意味する『修復』から、歯牙を積極的に保存し、咀嚼能力を維持しつつ、老化による全身的な衰えにも安全に対応できる『保全』という概念が必須となってくる。その点、コーヌスタイプのオーバーデンチャーは、咬合崩壊やオーラルフレイルに適用でき、その連結効果に加えて、歯根膜感覚を十分に活かせることで、十分な咀嚼能力・咀嚼感覚を得ることができる。また、本格的な老化を迎えて支台歯が弱っても、ほとんどの場合、自然脱落まで待つことができ、訪問診療等でのベッドサイドでも義歯修理が可能で、それを繰り返していくうちに、無理なく総義歯にまで移行できる。そうしたコーヌスのさまざまな利点を、症例を交えて紹介させて頂きたい。

先田寛志先生 大阪府開業



私が初めて金属を一切用いない、ジルコニア内外冠によるノンメタルコーヌス義歯を作製してから、もうかれこれ13年以上になります。その私が母に作製したコーヌス義歯は、ドイツから来た正統派と呼ばれるコーヌスクローネ義歯ではありません。コーヌスとは、『円錐』と訳されます。円錐形の内冠をノンメタル材料であるジルコニアで作製し、外冠のアタッチメントで維持力をはかったものです。それでも、13年間入れた当時のまま機能し続け、母は好物のタコやイカなど固いものでもなんでも、美味しく食べてくれています。今はメタルフリー全盛の時代です。歯周組織やカラダに優しく、歯根膜負担を活かしたジルコニアコーヌス義歯の臨床をその製作ステップや、実際の症例を通しご紹介させて頂きたい。